



目次	
●副会長あいさつ	1
●関ブロ実行委員長あいさつ	2
●関ブロ提言者の声	3～4
●全公教滋賀大会参加報告	5
●郡市教頭会ネットワーク	6
●新入会員の声	7
●随想	8



## 「主体的・対話的で深い学び」を 目指す研究大会に

新潟県小中学校教頭会

副会長 **小島 隆宏**

(上越市立春日小学校)

令和2年度は、小学校の新学習指導要領の完全実施、中学校では移行措置の最終年度になります。私たち教育に携わる者にとって、大きな変革の時を迎えています。夏季休業中は、前期(1学期)の教育活動を振り返り、成果と課題を明らかにし、後期(2・3学期)の教育活動への準備を進める期間です。さらに今年は、新学習指導要領の移行措置の取組を振り返り、来年度の取組を検討・協議をした学校が多かったのではないのでしょうか。

小学校では、指導時数の増加にどのように対応するか、具体的に言えば、校時表をどうするか等、新しい教育課程編成に向けて学校全体で検討を進めた夏季休業であったことと思います。

一方で、国、県教育委員会、市教育委員会から示された教職員の時間外勤務月145時間未満、一年360時間未満の完全実施に向けた「働き方改革」、「業務改善」の取組について、具体的な策が求められています。

学校現場は今、目の前にある複数の喫緊の課題の解決に向けて、まさに待ったなしで同時並行で取組を進めなければならない状況にあります。

そんな中、8月2日(金)に沖縄県南城市教育委員会が主催したカリキュラム・マネジメント研修会に講師として参加する機会を得ました。この研修会には、南城市の小学校の全教員、中学校の全管理職が参加し、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、各学校の教育課程の編成の一つの手立てとして、「視覚的カリキュラム表<sup>※</sup>」を作成する研修が行われました。午前中は、同行した弥彦小学校石黒和仁校長が「上越カリキュラム」(上越市立教育センター／上越カリキュラム開発研究推進委員会)について説明を行い、私が現場でのカリキュラムマ

ネジメントの実際について説明を行いました。午後の研修では、参加した教員が学校ごとに「視覚的カリキュラム表<sup>※</sup>」の作成を行いました。

南城市教育委員会が主催したこの研修会は、新学習指導要領実施を目前にして、教職員のカリキュラム・マネジメントの力の向上に努めることを目的として行われたものです。研修会を通して、南城市の全小中学校が「視覚的カリキュラム表<sup>※</sup>」の作成に取り組もうと市内の全教員が参加していました。

午後の視覚的カリキュラム表<sup>※</sup>づくり作業で各グループを回り、アドバイスをして感じたことがあります。それは沖縄の教職員の意欲的に学ぶ姿であり、自校の学校課題や目指す子どもの姿を各校の教頭先生が同僚と真剣に語り合う姿があったことです。PCの画面で各教科のつながりが見えることからカリキュラムデザイナーとしての自覚が生まれ、研修の成果が学びにつながっていることを実感することができました。まさに参加者の主体的で対話的な学びを見ることができた研修会でした。

さて、11月7日(木)、8日(金)には関ブロ教頭会研究大会新潟大会が開催されます。関東甲信越ブロックの仲間を迎えて、3年間にわたる研究実践を報告し、研究の成果と課題を明らかにする貴重な機会となります。来年度からの第11次全国統一研究主題に基づく新しい研究、また新学習指導要領の実施に向けて、絶好の研修の機会です。主管教頭会として、主体的で対話的な学びを実感できる2日間となることを期待しています。

\*特色ある学校のカリキュラムを視覚的に分かりやすくしたもの。教科の枠を超えて、カリキュラムの中に埋め込まれている今日的課題に対応する取組や学校の特色ある取組を、視覚的に分かりやすく表すことができる。



## 関プロ実行委員長あいさつ

新潟県小中学校教頭会

副会長 **牧野 剛**  
(新潟市立松浜中学校)

11月7日(木) 8日(金)に開催される第60回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会新潟大会が間近に迫って参りました。

本研究大会開催にあたり、新潟県・新潟市を始めとする15の教育関係団体様より御後援をいただきました。心より御礼申し上げます。並びに、御来賓として御出席いただきます、新潟県知事 花角英世様、新潟市長 中原八一様、新潟県、新潟市の教育長様を始めいたします15名の皆様、御多用にもかかわらず誠にありがとうございます。

新潟県小中学校教頭会は、新潟県小中学校教育の発展を目指し、研究活動を中心に据え、会員相互の交流を重視した活動を推進しています。令和元年の研究大会は、関東甲信越地区公立学校教頭会の研究大会を兼ねて新潟で開催いたします。提言して下さるのは、5課題12分科会に新潟県からお一人ずつ、関東甲信越からお一人ずつの24名の教頭先生方です。提言内容につきましては、6月に開催された「提言者研修会」で、発表の骨子と当日の討議の柱立てを経てまとめていただきました。

また、「提言者研修会」当日は、新潟県教育委員会の上・中・下越教育事務所、新潟市教育委員会の教育総務課・学校人事課・地域教育推進課・学校支援課の管理主事・指導主事の助言者の皆様にも御参加いただき御指導をいただくことができました。助言者の皆様方、新潟大会当日もお世話になります。必ずや討議の柱に基づいた主体的な分科会となることを確信しております。

新潟大会のサブテーマでもある、「主体的に学び、たくましく生き抜く子ども」を育成するためには、グローバルな視点が欠かせません。今回記念講演をお願いいたしました、新潟県神林村御出身の天文イラストレーター、天体写真家の沼澤茂美様は、NHKの科学番組の制作や海外取材、ハリウッド映

画のイメージポスターを手がけるなど、まさに世界を舞台にしたお仕事をされています。副校長・教頭としての視野を広げ、これからの学校教育に大切な御示唆をいただける御講演になることをお約束いたします。

校長先生の御指導の下、「社会に開かれた教育課程」実現に向けて、学校運営の中核を担い日々邁進する副校長・教頭職の私たちにとって、多忙な現場を離れ一堂に会して研修を行う場は極めて貴重です。私たちの研修のために、ご配慮いただきました、各学校の校長先生方、職員の皆様方に感謝して本研究大会を迎えたいと思います。参加いただける副校長・教頭先生方どうぞよろしく願いいたします。

結びに、実行委員長の役目を通して、どれほどの方々にお世話になり、助けられ、どれほどの先人の教頭先生方が多くの汗を流されたのかを改めて実感することができました。3年に及ぶ、準備期間を共に過ごした企画運営委員・事務局・実行委員の教頭先生方、新潟大会のシンボルマークを胸に最後の最後まで一致団結して大会の成功を目指しましょう。



新潟大会のシンボルマーク

# 関ブロ提言者の声



## 伝統芸能「綾子舞」を 持続可能な活動を目指す取組

柏崎市刈羽郡小中学校教頭会

江田 浩  
(柏崎市立南中学校)

柏崎市刈羽郡教頭会では、これまで教育活動の費用対効果という見方や財務マネジメントという視点で研修に取り組んできました。今年度は「子どもの学びを支える教頭の財務マネジメント」をテーマに研究実践を進めてきました。関ブロ新潟大会では、この研究から南中学校区にある鶴川地区で500年前から伝わる国指定重要無形民俗文化財「綾子舞」をどのように教育活動に反映できるか、その方策と活動に必要な財源確保に向けた予算検討など、活動実現に向けた取組を提言します。

本研究では、「綾子舞」にかかわる活動をカリキュラムマネジメントと財務マネジメントという2つの側面から実践を進めました。カリキュラムマネジメントでは、2つの取組を設定しました。ただ、取組を検討したとき、考慮したことは生徒や職員への負担でした。そこで、「綾子舞」にかかわる活動を計画に「加える」のではなく、「取り入れる」という視点で検討しました。また、「綾子舞」を系統的に学ぶため、発達段階に応じた学習を考えました。財務マネジメントでは、学校予算だけでなく柏崎市が行っている推進事業にかかわる予算を含め、全職員で検討を進めました。昨年度の教育予算の執行状況を見直し、改善できることを検討して今年度の予算を計画しました。

これらの実践から、「綾子舞」にかかわる学習をこれまでの教育活動に取り入れることにより、活動に厚みが増し、教育的効果が向上したり、全職員で教育予算を検討したことにより、職員の意識が高まったりするなど一定の成果が表れました。しかし、多くの課題も残りました。今回の大会では、これまでの「綾子舞」にかかわる活動や取組をできる限りわかりやすく提言したいと考えています。南中学校の活動が今後も持続可能で教育的価値が高まるような活動になるよう、皆様の忌憚のないご意見をよろしくお願いいたします。



## 関ブロ研究大会 新潟大会に向けて

長岡市三島郡小・中・総合支援学校教頭会

栗林 育雄  
(長岡市立日越小学校)

第60回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会が新潟で開催されます。今回、第1分科会「教育目標・教育理念に関する課題」において、長岡市三島郡小・中・総合支援学校教頭会を代表しまして、西中学校区での小中連携の取組について発表します。

西中学校区では、学区全体で抱える学力向上、生徒指導上の課題を解決すべく、西中学校と4つの小学校が連携する西中学校区教育職員連絡協議会（西連協）が平成10年に発足しました。

西中学校が目指す「意欲あふれる生徒」「友愛に満ちた学校」を中学校区的全職員が共通理解し、目指す子ども像の実現に向けて、各校が様々な教育活動を展開しています。また、「学校評価」「学習指導」「生徒指導」「体力健康」「特別支援」の5つの部会が計画する共通実践や全員研修などの事業を行っています。中学校区での連携を年々充実させ、一定の成果を上げてきています。

一方で、継続して行われてきた事業の中には、活動が年々増加してしまったり、前年度踏襲で成果と課題を検討しないまま引き継がれてきた取組も多くありました。喫緊の課題である働き方改革を実現しながら、今後も西連協として継続・発展していくためには、職員の負担軽減を考慮した上で、より有効な教育活動へと改善していくことが求められます。

このような小中連携事業の中で教頭が果たす役割は、中学校区全体の状況を捉え精査し、よりよい活動の在り方や方向について、全体のバランスを考慮しながら舵取りをしていくことであると考えています。

目指す子ども像の共有と実現に向けて、教頭としてどのように関わり、支えていくのか。実践の様子を紹介しながら提言を行い、分科会に参加する各都県での取組や現状についての情報を得ながら、更に研究を深めて今後の実践につなげていきたいと考えています。

# 関ブロ提言者の声



## 関ブロ新潟大会に向けた 見附市教頭会の取組

見附市教頭会

恩田 康一

(見附市立南中学校)

見附市教頭会は、今回の関ブロ新潟大会の第三分科会「施設・設備及び事務に関する課題」について、防災教育の視点から研究に取り組むことにしました。

見附市は平成16年7月に新潟・福島豪雨で甚大な被害を受け、同年10月には中越地震にも見舞われた地域です。災害復興とともに防災にも一層力を入れることになった見附市は、学校の防災教育の充実を図ることとしました。見附市総合防災訓練への参加、「ふるさと新潟防災学習」の取組、防災キャンプの実施等、市内13の小・中・特別支援学校がそれぞれ豊富な実績と実践例をもっています。

そこで、今回、関ブロ大会の発表の機会をいただいたときに、見附市教頭会で話し合い、これまでの見附市内の学校の防災教育を施設・設備の観点から捉え直し、防災体制の強化と防災教育における教頭の役割を見直そうと考えました。

毎月行われる教頭会では、これまでの各校の取組を紹介し合い、校舎そのものや学校の地理的条件に合わせた防災の在り方がいかにあるべきか、研修を積み重ねました。

例えば、避難訓練では、校舎から逃げることを訓練します。しかし、実際には多くの学校が避難所になります。児童生徒は地域の避難者とともに学校に泊まることもあります。校舎が避難所になるときの教頭の役割は何か、また、避難者として学校に残された児童生徒にできることはないのか、地域の避難者を学校が迎え入れる体制と防災教育の在り方を探りました。さらに、災害時に避難所となる地域の公民館や遊水池なども、学区内の施設・設備として捉え、防災教育の場面として考えることにしました。

災害が発生した場合、児童生徒の周りに避難時の機動力となる大人がいないことは十分に想定されます。その際に、児童生徒が安全に避難しつつ、災害時に地域の力になり得るような防災体制や防災教育の在り方について改めて考えることができました。



## “わくわくドキドキ” 令和最初の関ブロ大会

佐渡市小学校教頭会

土屋 雅朗

(佐渡市立二宮小学校)

佐渡市小学校教頭会を代表しまして、第60回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会新潟大会第4分科会A「組織・運営に関する課題」において提言させていただきますことになりました。

提言主題は、「学校における働き方改革を推進させる教頭の役割」副題は、「地域社会からリスペクトされる『コンパクト・スクール』の実現を目指して」です。

佐渡市小学校教頭会では、これまで、教職員の参画意識を高め、協働体制を築く教頭のかかわりについて研究を進めてきました。この研究から得た様々な成果や課題を共有してきた一方で、その取組の推進上の課題として、業務改善を前提にした教育活動の精選、学校における働き方改革があげられました。

このような中、本年1月、中央教育審議会において「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について（答申）」がまとめられました。

そこで、本提言では、佐渡市でも課題解決が急務となっている「学校における働き方改革」に焦点を当て、教頭としてどのようにこの改革を推進していくか、追求していく過程をまとめさせていただきました。そして、学校における働き方改革の推進による「コンパクト・スクール(本稿での定義:膨れあがった様々な業務を改善・精選・焦点化することで、教職員の心身の健康と教育の質の向上が図られている学校=人口減少社会に対応した持続可能な学校)」の実現を目指して、児童や保護者、ひいては地域社会からリスペクトされる学校を目指す教頭の役割について一考することとします。

令和元年11月7日・8日の両日は、関東甲信越地区の英知あふれるたくさんの副校長、教頭先生方から、様々な取組や工夫された実践を学んだり、情報交換したりできることを今から“わくわくドキドキ”しています。

# 全公教滋賀大会参加報告



## 「持続可能な社会の 担い手となる子どもの育成」

三条市小中学校教頭会  
小池 純一  
(三条市立下田中学校)

このたび、全公教滋賀大会に参加をさせていただきました。2700名を越える副校長・教頭が集まりシンポジウム、分科会、記念講演が開催されました。

### 1 シンポジウム

柱となったのはESD (Education for Sustainable Development「持続可能な開発のための教育」)。オプティクス(株)相談役の小林徹氏からは琵琶湖を活用したスポーツ体験学習・水環境体験学習の場を子どもたちに提供している取組、児童文学作家の今関信子氏は学校と地域が協働し活性化していった例、東京学芸大学顧問の勝山浩司氏は子どもたち(親も)が力を発揮する体験場面がなくなってきている(無動状態)ことを指摘され、受動ではなく能動的な体験活動から学ぶことの大切さが訴えられました。コーディネーターの滋賀県立大学名誉教授の小林圭介氏からは「持続可能」のとらえ方として、自然環境としてのとらえ方、システム・プロセスとしてのとらえ方、そしてそれを繋ぐ歴史や風土の中での人間形成としてのとらえ方を示していただきました。副校長・教頭には「効果的で持続的実践活動」を導く情報を適切に提供・対応することが求められていると助言していただきました。

### 2 分科会「組織・運営に関する分科会」

第4分科会では小規模校の課題克服・学校活性化を目指した取組、校内研究・授業改善による教育目標の具現化を目指した取組が発表されました。どちらの取組も課題とねらいが理解され、そのテーマが横(人と人)、縦(時間、年月)で繋がっていったことで効果を上げた、大会テーマにふさわしい素晴らしい発表でした。また、提言発表の後の協議会では「働き方改革」の視点を加えて有意義な情報交換、意見交換ができました。

新たな視点での教頭としての役割が示され、刺激と活力を与えていただきました。今大会に参加させていただき大変ありがとうございました。



## 全公教 滋賀大会に参加して

新発田市・北蒲原郡小中学校教頭会  
角 直浩  
(新発田市立佐々木中学校)

7月31日から8月2日までの3日間、滋賀県大津市で開催された「全国公立学校教頭会研究大会」に参加させていただきました。全国から集まった先生方との交流、熱のこもった協議会は、とても刺激となり、今後への活力となりました。

2日目は各分科会に分かれての協議会でした。私の参加した第1B分科会のテーマは、「教育課程に関する課題」。協議の柱として①小中連携を中核に捉えた「確かな学力向上」の取組に、副校長・教頭はどのように関わっていくべきか、②教頭の立場から「次代を生きる子どもたちに必要な資質・能力」をどのように見極め育てていくか、でした。

分科会には全体で200人ほどが集まっていたのですが、7～8人ずつの小グループに分かれ、それぞれのグループにおいて、協議の柱に沿って話し合いが進められました。私のグループは、埼玉、兵庫、岩手、福岡、京都、滋賀からの参加者で構成され、テーマに関してそれぞれの学校での取組や教育課題、地域の特性などについて意見交換が行われました。やはり、それぞれの地域によって様々な違いがあり、新鮮な驚きや感心の連続でした。

分科会全体会では、次のようにまとめられました。

「『小中連携による学力向上』『社会に開かれた教育課程』について教頭は中心となって『協働』を仕掛けることが大切である。教育課程改善のための取組に若手教員を積極的に関わらせ、若手の人材育成、持続可能な仕組みづくりにつなげていくことが重要である。」

「教頭」として、様々な課題に対してどのように向き合い対応していくか、色々な角度からの意見を交流させることができた中味の濃い3日間でした。

余談となりますが、大学時代の寮で同部屋だった友人と会場でバッタリ出会ったり、大学生になったメキシコ日本人学校での教え子と再会できたりしたことも、この研究会に参加したご褒美となりました。

# 郡市教頭会ネットワーク



## 加茂・田上教頭会の 中の田上教頭会

加茂市・南蒲原郡小中学校教頭会  
石澤克彦  
(田上町立田上中学校)

加茂・田上教頭会は加茂市と田上町の小学校9ヶ校、中学校6ヶ校の計15ヶ校で組織されている。加茂市、田上町のそれぞれをベースとしながらも年3回の情報交換会を行っている。

田上町は、田上の子は田上で育てるという理念のもと、「田上の12ヶ年教育」を推進している。幼・小・中と繋がりを大切にした教育を薦める上で情報の共有、連絡調整等、教頭間の連携はより大きな役割を果たすことになる。田上町は1中2小の3ヶ校の規模であり、連絡調整を図りやすい状況である。また、教頭の研修会は田上町教育研究協議会に教頭部会を位置づけて年3回実施している。教育長より教頭としての心構えについてご講話をいただいたり、管理指導主事を講師に「田上町の12ヶ年教育」についてご講演いただいたりと田上町の教育について研修を続けている。本年度は新学習指導要領の完全実施に向けて、町の管理指導主事を講師にプログラミング教育についての理論を学び、実際に体験するなど楽しく研修を行っている。

限られた規模の教頭会であることで教育委員会からの支援を受けることができるが、情報交換も限られた規模になっている。

その中で、加茂市教頭会と連携がとれることは、田上にとっても有益なことである。年3回実施している加茂・田上教頭会は情報交換の場であり、ネットワーク構築の場でもある。多忙化解消に向けた取組、部活動のあり方、学力向上に向けた取組など各校の実践を聞くことができ大いに参考になった。今年度は、中越地区ブロック研修大会に向けた研修会も実施し、より繋がりが深まっている。

加茂・田上教頭会は加茂市・田上町2つの市・町をベースとしながらも、より加茂・田上教頭会の繋がりが強くなっていくことが期待される。



## 五泉市小中学校 教頭会の紹介

五泉市小中学校教頭会  
会長 山田耕世  
(五泉市立五泉小学校)

五泉市小中学校教頭会は、小学校9校、中学校4校の計13名の教頭で構成されています。普段はこの他に、特別支援学校の教頭1名と市内の幼稚園の主任の先生方からも来ていただき、情報交換・情報共有を大切にしながら日々取り組んでいるところです。

### 1 開かれた研修体制

毎月の教頭会では、五泉市教育委員会の皆様からご指導をいただきながら、子どもたちや教職員の資質・能力をいかにして育成するか、また各学校の教育課題をいかにして改善・解決していくかについて研修を深めています。月ごとに研修テーマを決め、小グループで、日常の悩みを気楽に出し合いながら本音で語り合えるところが最大の魅力です。

特に今年度は、教頭会だけで研修を閉じるのではなく、各学校の事務職員の皆様からも研修に入っていただき、協働的に研修を進めることを大切にしています。

先日は、「財務」について合同研修会を行いました。前半は、財務会計の流れや仕組みを確認しました。後半は、「決裁が回ってきた時、どのような点に注意して決裁印を押すか」等、具体的な事例に基づいて考えることで、学びを深める機会となりました。市内の事務職員の皆様とのつながりが深まったことも大きな成果でした。今後は、更に「人事管理」についても合同研修会を行う予定になっています。

### 2 顔と顔とのつながりを大切にしたい会

五泉市小中学校教頭会は親睦も当然大切にしています。例えば7月の納涼会には、日頃お世話になっている事務職員の皆様や五泉市教育委員会の皆様に招待しています。毎年盛大に行われております。

これからの学校はますます様々な人と深いつながりが求められています。これからも顔と顔とのつながりを大切にしながら、子どもたちや教職員のために力を尽くす教頭会でありたいと考えております。



## 地域と一緒に、子ども 職員も笑顔の学校に!

糸魚川市立南能生小学校

大瀬 孝志

赴任し、「自然が豊かで熱い地域」これが第一印象でした。初めは、教頭と呼ばれることに慣れず、呼ばれる度に教頭であることを再認識する日々でした。

当校は、職員数が8名と少ないため、教諭だけでなくすべての職員が一人何役もこなし、保護者や地域の方々の協力を得ながら、職員・保護者・地域が一丸となって、子どもの笑顔のために中身の濃い体験や実感を伴う学習活動などに取り組んでいます。

教頭として、職員が働きやすい環境を作り、少しでも負担を軽減できるように、業務の見直しや職場環境の改善を意識して、日々の業務を行っています。さらに、保護者や地域との絆を太くし、笑顔があふれ、信頼される学校であり続けられるように、目配り・気配りができるまとめ役の教頭を目指して頑張ります。ご指導よろしく申し上げます。



## 大規模校、小針中

新潟市立小針中学校

庭田 茂範

4月、832名の生徒、68名の職員とスタートしました。今まで比較的小規模の学校しか経験のなかった私にとって、日々新鮮なことばかりです。

給食（新潟市はランチシステムです）の時には廊下が一部「一方通行」になります。昔ながらの狭い廊下の校舎であることも重なって、人の流れはすさまじいです。

定期テストの下校時には「時差下校」をしています。一齐に下校すると玄関が混むことと周辺道路の交通を考えたときに危険なのが理由です。

教頭として流れをつくるべきなのですが、日々流され続けている毎日です。

教頭が2人ということで、いつも助けをいただきながら、仕事を進めています。教頭としての職務を一生懸命努めて参りたいと思います。よろしくお願いたします。



## 新任教頭として

燕市立燕中学校

近藤 宏

「水を運ぶ選手が必要だ」。これは元サッカー日本代表監督イビチャ・オシム氏が、当時の日本代表チームについて記者からの質問に受け答えた言葉である。攻守を問わず、チームの勝利のために献身的にプレーする選手の必要性を説いたのだ。

私も水を運ぶ人でありたい。目の前の生徒たちが笑顔で生き生きと活動できるように、せっせと水を運ぶ教師でありたいと心に決めている。

新任教頭として燕市立燕中学校に着任し、今度は管理職として、学校運営に関わる水を運んでいきたい。生徒が生き生きと生活し、教職員が全力で生徒と向き合えるよう、学校長の指導の下、環境を整えていきたい。

まだまだ私の器は小さい。その分泥臭くあっても繰り返し水を運びながら、学校のチーム力を高めるとともに、自らの識見を広めていきたいと考える。



## 学校と地域の橋け橋に

阿賀野市立水原中学校

樋口 憲哉

「阿賀野川ゆるくながれて…」始業式で流れた校歌をよどみなく歌うことができ、自分でも驚き、そしてうれしく感じました。新校舎になって5年目を迎えた水原中学校は私の母校です。

今年度、校長先生が掲げた学校経営方針は「校舎が褒められる学校から、生徒が褒められる学校へ」です。今、心掛けているのは生徒のよさや頑張りを「生徒自身に返す」こと、「保護者・地域に発信する」ことです。そのためにも生徒とのかかわりを大事にし、先生方に寄り添い…と思いつつ、現状は絶え間なくやってくる文書処理や様々な緊急対応に四苦八苦。校長先生や同僚、地域の方々に助けられるばかりの1学期でした。地域と学校のよき懸け橋になることこそが、母校に勤務する自分の役割だと考えています。後輩の健やかな成長をたくさん伝えられるよう、精一杯職務に励んでいきます。

# 随 想



## 地域の伝統と人を 繋げていくために

小千谷市立片貝小学校

福島 良和

片貝と言えば、多くの方が「まつり」(片貝では「祭り」ではない。)[「花火」を思い浮かべるだろう。地域全体がまつり・花火で熱くなる。そんな地域の方々が、学校教育に何を望むのか。次の視点、「伝統・行事」「人に学ぶ」「人と知り合う」から、学校の取組を振り返ってみた。

「伝統・行事」にふれる取組として、11年続いている伝統芸能「巫女爺」を学ぶクラブ活動。4年生の総合学習でも伝統芸能保存会の方々から学ぶ。踊りや唄、篠笛を練習し、地域行事や特養施設などで披露している。まつりにおいては、屋台町内曳き廻しを盛り上げるために、全校で「道中木遣り」を練習する。6年生が音頭をとって町内に威勢の良いかけ声が響く。どちらも途絶えかけた伝統・行事であったが、地域の願いを学校でくみ取り、伝統ある行事を引き継ぐ意識を高めている。

「人に学ぶ」取組として、地域に根ざした仕事をしている方にキャリア教育で学んでいる。藍染めを中心に半纏や浴衣を製作する会社、日本一の四尺玉を製作する煙火工業、地域医療を支える医師等々。地域には、地域に愛着と誇りをもって働いている方が多くいることを知り、子どもたちの郷土愛は深まっている。

「人と知り合う」取組としては、「合同防災訓練」「あいさつキャンペーン」に参加する。ご近所の方と共に防災訓練をすることで、お互いを知り合い、防犯にも繋げている。「あいさつキャンペーン」では、小中・地域との連携で縦横ななめにも知り合いになっていく。地域に知っている方が増えることが、大好きな片貝の安全・安心に繋がっていく。

同期の繋がりが強く、一生の仲間として節目節目に花火をあげる。まつりにかかわるために、縦にも地域にも繋がりが大切な片貝。今、この地域にも少子高齢化の波は訪れている。たとえ人数が減っても、この地域の伝統を、人と人との繋がりを誇りに思う人づくりが、地域が最も望んでいることと私は実感している。現在行っている学校の取組が、その一助になっていることを信じて、当校の教職員は、お揃いの半纏、藍染めのTシャツでまつりに参加し、日々心を一つにしている。



## 「鮭の子」を育てる

村上市立神納東小学校

貝 沼 史 弘

青砥武平治は、世界で最初にサケの母川回帰の習性を利用して、三面川に分流「種川(たねかわ)」を考案した江戸時代の村上藩士である。

私も小学生のときには、鮭をとることはなかったが、鮎やヤマメ、カジカなど、地域の小学生でいつも日が暮れるまで三面川で遊びまわっていた。

小学生当時、村上市に30校以上あった小学校も統廃合が進み、来年度で半数以下の13校になる。

私が今年赴任した神納東小学校も144年の歴史に幕を下ろし令和2年3月に閉校となり、4月から3校が統合し、新しく神納小学校として出発する。

神納東小学校は、明治8年に創立された長い歴史をもつ学校である。幾度かの増改築を繰り返しているが、校地の所在地は今も昔も変わらない。また、他校との統合も今まで一度も行ったことはなかった。だからこそ、今年の閉校、そして来年度からの統合に関する地域の関心はとても高かった。

だからこそ、4月に赴任した私には「閉校に向け何ができるか」という思いばかりが頭にあった。しかし、閉校について地域との話合いの場で、「閉校について悲しい思いはある。だが、統合で人数が増えたからこそできること、よくなることを学校から地域に伝えて欲しい」と言われた。考えれば当たり前の話だが、私の頭にはこの考えがほとんどなかった。神納東小学校がなくなっても、子どもたちの学校生活は続く。学校は、それぞれの学校のよさを活かしながら新たな発展方法を保護者、地域と熟議の中で導きだしていかなければならない。地域の方々が手を取り合って、伝統や地域文化を大切に、心豊かな子どもを育て、新しい神納小学校の歴史を築いていけるよう自身ができることに尽力していきたいと考えている。

青砥武平治が鮭をふるさとである三面川に数多く戻らせたように、地域のよさを子どもたちに伝えながら大人になっても地域に戻ってくる「鮭の子」をこれからも育てていきたい。

新潟県小中学校教頭会  
[事務局]  
県教頭会ホームページ  
全国公立教頭会ホームページ

〒950-0911 新潟市中央区笹口2丁目7-17 和田ビル2F  
E-mail n-kyotoh@crest.ocn.ne.jp TEL (025) 244-8225  
http://www.niigata-kyotokai.jp/ FAX (025) 244-5060  
http://www.kyotokai.jp/